

● 練成問題

① 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

婦人が手にとらないのを遠慮だと解釈した先生は、このときちょうど、紅茶茶碗を口へ持っていきこうとしていた。^{*} なまじいに、くどく、すすめるよりは、自分ですすってみせるほうがいいと思ったからである。ところが、まだ茶碗が、やわらかな口ひげにとどかないうちに、^① 婦人の語は、突然、先生の耳をおびやかした。茶を飲んだものだろうか、飲まないものだろうか。

——こうした思案が、青年の死とは、まったく独立して、一瞬の間、先生的心をわずらわした。が、いつまでも、持ちあげた茶碗を、かたづけずにおくわけにはいかない。そこで先生は思いきって、がぶりと半碗の茶を飲むと、心持ち眉をひそめながら、むせるような声で、「そりゃあ」と言った。

——……病院におりました間も、よく^② あれがおうわさなどいたしたものでございますから、おいそがしかろうとはぞんじましたが、お知らせかたがた、お礼を申しあげようと思ひまして……

——いや、どうしまして。
先生は、茶碗を下へおいて、そのかわりに青い蠟をひいた団扇をとりあげながら、^{*} 惘然として、こう言った。

——とうとう、いけませんでしたかなあ。ちょうど、これからという年だったのですが……私はまた、病院のほうへもご無沙汰していたものですか、もうたいてい、よくなられたことだとばかり、思っていました——^③ すると、いつになりますかな、なくなられたのは。

——昨日が、ちょうど初七日でございます。

——やはり病院のほうで……

——さようでございます。

20

15

10

5

——いや、実際、意外でした。

——なにしろ、手のつくせるだけは、つくしたうえなのでございますから、あきらめるよりほかは、ございませんが、それでも、^④ あれまでにいたしてみますと、なにかにつけて、愚痴がでていけませんものでございます。

こんな対話を交換しているあいだに、先生は、意外な事実気がついた。それは、この婦人の態度なり、^{*} 挙措^{きよそ}なりが、少しも自分の息子の死を、

語っているらしくないということである。目には、涙もたまっていない。声も、平生のとおりである。そのうえ、口角には、微笑さえ浮かんでいる。これ、話を聞かずに、外貌^{がいはら}だけ見ているとしたら、だれでも、この婦人は、^{*} 家常茶飯事を語っているとしたら、思わなかったのに相違ない。——先生は、これが不思議であった。

が、^⑤ 第一の発見のあとには、まもなく、^⑥ 第二の発見がついで起こった。

ちょうど、主客の話題が、なくなった青年の^{*} 追懐^{ついかい}から、その日常生活の^{*} デイテイルにおよんで、さらにまた、もとの追懐へもどろうとしていたときである。なにかの拍子で、団扇が、先生の手をすべって、ぱたりと寄木の床の上に落ちた。会話はむろん寸刻の断続をゆるさないほど、切迫しているわけではない。そこで、先生は、半身を椅子から前へのりだしながら、下をむいて、床のほうへ手をのばした。団扇は、小さなテエブルの下に——上靴にかくれた婦人の白たびのそばに落ちている。

そのとき、先生の目には、偶然、婦人のひざが見えた。ひざの上には手巾を持った手が、のっている。もちろんこのことは、発見でもなんでもない。

が、同時に、先生は、婦人の手が、はげしく、ふるえているのに気がついた。ふるえながら、それが感情の激動を強いておさえようとするせいか、ひざの上の手巾を、両手で裂かないばかりにかたく、にぎっているのに気がついた。そうして、最後にしわくちやになった絹の手巾が、しなやかな指のあいだで、

さながら微風にでもふかかっているように、ぬいとりのある縁を動かしているのに気がついた。——婦人は、顔でこそ笑っていたが、じつはさつきから、

45

40

35

30

25

9 古典

学習の要点

歴史的かなづかい

- ・ゐ ↓ 「い」 (例 ゐたり) ・ゑ ↓ 「え」 (例 こゑ)
- ・ぢ ↓ 「じ」 (例 ふぢ) ・づ ↓ 「ず」 (例 よろづ)
- ・を ↓ 「お」 (例 をとこ) ・む ↓ 「ん」 (例 やむことなし)
- ・くわ ↓ 「か」 (例 くわじ) ・ぐわ ↓ 「が」 (例 ぐわんじつ)
- ・ア段十う (au) ↓ 「オ段十う (o)」 (例 あふさか)
- ・イ段十う (ie) ↓ 「イ段十ゆ十う (yu)」 (例 あやしう)
- ・エ段十う (eu) ↓ 「イ段十よ十う (yo)」 (例 てふてふ)
- ・ほ・ひ・ふ・へ・ほ ↓ 「わ・い・う・え・お」

係り結びの法則

(例 答へていはく・問ふ・よそほひ・いひける)

係り助詞	働	結びの形	例
ぞ・なむ	強意	連体形	もと光る竹なむ一筋ありける
や・か	疑問・反語	野守は見えずや	君が袖振る
こそ	強意	已然形	しばしとしてこそ立ちどまりつれ

文語表現の特徴

省略が多い。

① 助詞の省略 (例 いほり(が)あり)

(例 炭(を)もてわたる)

② 述語の省略 (例 夏は夜(が)よい)

③ 主語の省略

四季の区別と月(陰暦)の名称

春	夏	秋	冬
1月 睦月	4月 卯月	7月 文月	10月 神無月
2月 如月	5月 皐月	8月 葉月	11月 霜月
3月 弥生	6月 水無月	9月 長月	12月 師走

確認問題

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

① 秋は夕暮れ。夕日のさして山の端いと近うなりたるに、鳥の寝どころへ行くとて、三つ四つ、二つ三つなど、飛びいそぐさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いとちひさく見ゆるは、いとをかし。日入りはてて、風の音、虫の音など、はたいふべきにあらず。
〔枕草子〕より

(注) はたいふべきにあらずはまた改めて言うまでもない。

□(1) 線③「ちひさく」を現代仮名遣いに書き直して答えなさい。

□(2) 線①「秋は夕暮れ」のあとにはどんな意味のことばが省略されていますか。次から最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

- ア くを思う。 イ くがよい。
ウ くのようなだ。 エ くに当たる。

□(3) 線②「あはれなり」と意味の似ている三字のことばを、本文中から書き抜いて答えなさい。

□(4) 線④「見ゆるは」を、十字以内で口語に直して答えなさい。

□(5) 「枕草子」の作者を漢字四字で書いて答えなさい。

2 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

人のただ一言ただ一わざによりてその人のすべての善き悪きを定め言ふは
 * 漢書の常なれども、これいと当たらぬことなり。すべて、善き人といへ
 どもまれには ② ことわりになかなはぬしわざも交じらざるにあらざ。あしき人
 といへども善きしわざも交じるものにて、 ③ 生けるかぎりのしわざことごと
 に善き悪き一方に定まれる人は * をさをさ無きものなるを、いかでかただ一
 言一わざによりて定む ④ べき。人の生まれつきさまさまあるものなり。物の
 道理、事の利害など、すべて ⑤ よろづのことを心にはよく ⑥ 思ひわきまへな
 がら、口には * ⑦ え言はぬ人もあり。また、口にはよく言へども、 * ⑧ しか行ふ
 ことはえせぬ人もあり。また、口にはえ言はねども、よく行ふ人もあり。ま
 た、口にはよく言へども、文にはえ書きいでぬ人もあり。また、口にはえ言
 はねども、文にはよく書きいづる人もあるなり。

〔本居宣長「玉勝間」より〕

〔注〕漢書＝中国の書籍。漢文の書物。

をさをさ＝あまり。容易にめつたに。

え言はぬ人＝うまく言えない人。「え+打ち消しの語」は「～するこ
 とができない」の意になる。

しか＝そう。そのとおり。

□(1) — 線①「よろづ」、②「思ひわきまへ」を、それぞれ現代仮名遣いに
 直し、すべてひらがなで書いて答えなさい。

A	B
---	---

□(2) — 線①「これいと当たらぬことなり」について、次のそれぞれの問い
 に答えなさい。

□①「これ」が指している内容を、現代語に直し、「一つの言動」というこ

とばを必ず用いて、「～こと。」という形で、三十五字以内（句読点も字
 数に数えます）で答えなさい。

こ と 。

□②「これいと当たらぬことなり」よりもあとの本文を、内容の上から二つ
 の部分に分けた場合、後半部分はどこから始まりますか。後半の部分の
 最初の一文の初めの五字を書き抜いて答えなさい。

--

□③ — 線②「ことわりになかなはぬしわざ」の意味として最も適切なものを
 次から選び、記号で答えなさい。

- ア 本人の弁解しようもないような失敗。
- イ 説明ができないような不思議な行動。
- ウ ひとが断り切れないような無理難題。
- エ 物の道理に合わないまちがった行為。

--

□④ — 線③「生けるかぎりのしわざ」の意味として最も適切なものを次か
 ら選び、記号で答えなさい。

- ア あらゆる生きものの行い。
- イ 晩年になってからの行い。
- ウ 一生の間のすべての行い。
- エ 精一杯生きるための行い。

--

□⑤ — 線④「べき」は通常、文末にあるときは「べし」と終止形になるは
 ずですが、このような形で結ばれているのは、どの係りの助詞のためです
 か。本文中からその助詞を書き抜いて答えなさい。

--